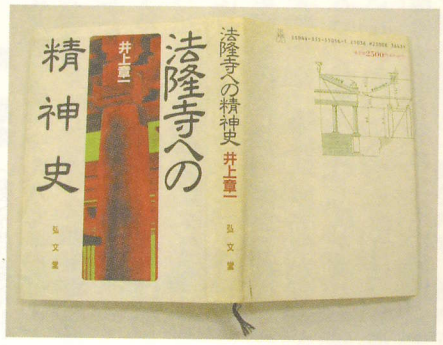
私の薦める１冊の本

井上章一著『法隆寺への精神史』

安彦 一恵（教育学部教授）



「法隆寺には、エンタシスというギリシア文化の影響を受けた技法が用いられている。」或る受験参考書にこういう趣旨のことが書かれている。私自身も昔そのように習った記憶がある。本書は、研究者の間でそういうことを言う人はほとんどいない、と語り始める。

しかし井上は、検証が不十分であると説くのでも、また、新たな説を提示するのでもない。氏の関心は、当時の学会や、さらには一般の人々の間で、なぜそのような「ロマン」（「夢」）—その一つとして「日本人はアーリア人だ」というものもあった—が語られたのか、にある。タイトルが「の精神史」ではなく「への精神史」となっていることに注意されたいが、本書は、一つの近代日本精神史として、そのような言説が語られてくる経緯を確認しながら、近代日本人の精神の在り方を明らかにしようとするものである。

「法隆寺そのものに興味があったわけではない。法隆寺を語り論じたひとびとの脳裏には、どのような観念があったのか。そして、その観念は、時代とともにどういった変容をとげたのか。私はそういう精神史に、関心をよせていた。」と述べられている。

本書は、文化的な自己意識を—フィクションだとして—脱構築しようという近年流行の「国民国家（日本）論」に分類することも不可能ではない。しかし、全体を読んでみて受け取る印象は、流行の諸議論から得られるものとはかなり異なる。氏には、新しい認識枠組みを行使するといった構えたところがない。執筆の動機は知的好奇心であると言ってもいい。

本書には、この好奇心のスタンスから遠いものとして、近代日本精神の、「ロマン」—それは、決して想像力の自由なはばたきといったものではなく、むしろ何かに取り付かれた状態とも言いうるものである—という、対象との距離を欠いた在り方を批判するメタ・メッセージも含まれている。

最近、「教養教育」の復権が語られているが、「人文（科）学」という観点から言うなら、いわば余裕をもって対象に向き合うという、一種「遊び」にも似た在り方が求められるところである。本書は、その一つの手本となるものでもあろう。

中村尚司著『豊かなアジア貧しい日本』

梅澤 直樹（経済学部教授）

書名を見て誤植？と思った人もあるかもしれない。だが、誤植ではない。本書は「豊かなアジア、貧しい日本」「洗濯ひとつで世界が見える」「生命系の経済と社会」「暮らしのなかの南と北」「歩きながら考える」の五部から構成されているが、循環性、多様性、関係性の内発的な展開をカギとした生気に満ちた豊かさとその対極としての従属関係の深まりとしての貧困という視点から、日本とアジアの人びとの暮らしや社会を見直すことを主要な課題のひとつとしている。

たとえば、第Ⅱ部のなかの「よみがえれ洗濯という仕事」では、同じく汚れを落とす営みでありながらなぜ入浴はくつろぎの時間、洗濯は面倒な仕事と分かれてしまったのかという問いから始めて、汚れとは何か、汚れを落とすとはどういうことかが追求されてゆく。そして、物的には同じ土埃でも時代や社会が違えば汚れであったりなかったりするというように、汚れが単なる物ではなくてむしろ社会関係であること、また清潔指向が昂じて汚れがけがれとされるとき差別が始まるというように、汚れの見方は差別意識とも結びつくことが明らかにされる。発展途上国に溶け込もうとしない日本人駐在員家族の意識としてばかりでなく、いわゆる朝シャン世代のクラスメートを見る目としても身につまされるところがなかろうか。さらに、清潔指向が現代における女らしさというジェンダー意識と結びついて女性の洗濯熱に圧力をかけていること、あるいは洗濯機や洗剤などの販売競争が商品を使わされる仕事としてのシャドウワークに洗濯を転じていること、だからこそ琵琶湖の保護をめざしたせっけん運動は、合成洗剤と洗浄力を競うのではなく、男女関係を含めた、汚れをめぐる人と人とのつきあい方を見直し、洗濯という仕事をよみがえらせる契機とされるべきだったことといった卓見が、鮮やかに語られているわけである。

もはや紙幅がなく立ち入れないが、第Ⅳ部でのアジノモトをめぐる考察も豊かさとは何かをあらためて考えさせてくれるし、援助から民衆交流へという提言も所得格差ゆえに陥りがちな陥穽を踏まえているだけに重みを持つ。また、当事者性をキーワードとした日本人のアジア研究に対する批判の舌鋒は鋭い。さらに第Ⅴ部での生活体験からの経済学の薦めも、経済学という学問の特質をよく踏まえたものであり、経済学のみでなく社会科学全般を学ぶ者に示唆的であろう。

豊かさの見直しが唱えられて久しい。また、真の国際化が唱えられても久しい。それを単なるお題目に終わらないために何が必要か、本書はそれを考えるうえできわめて刺激的である。グローバリゼーションが進むなかで在学中にアジアを訪れる学生も少なくない。さらに、本学にはアジアからの留学生も多い。そうした交流のチャンスを真に生かすためにも、本書が多くの人に読まれることを願う。